

総合的複合語に課される条件

大石 強

1. はじめに

本稿では、Oshita(1995)で論じられた総合的複合語(synthetic compound)の定義を再検討し、新しい定義を提案する。その際、総合的複合語に課される条件には、項構造に基づくものと事象構造に基づくものの2種類があると論じる。

第2節では、総合的複合語の新しい定義を提案し、第3節で、その新しい定義を提案する動機となる項構造に基づく条件と事象構造に基づく条件を順次検討していく。第4節はまとめである。

2. 総合的複合語の定義

Oshita(1995)は、従前の総合的複合語の定義を大きく(1)と(2)の二つにまとめている。

(1) 総合的複合語の形態的定義¹

動詞から派生された主要部をもつ複合語は総合的複合語である。

(2) 総合的複合語の形態・意味役割的定義²

非主要部が動詞から派生された主要部の内項条件を満たす複合語は総合的複合語である。

(2)の形態・意味役割的定義の方が、主要部と非主要部の関係に重点を置いている点で、(1)の形態的定義よりも言語学的に重要な事実をとらえている。しかしながら、Oshita は、次のような例で形態と内項条件の間で不一致が起きていると主張する。

- (3) a. taxi driver, screwdriver, city driver
- b. letter-writing, handwriting, pleasure writing
- c. man-made, hand-made, homemade

Oshita は、(3)では主要部が同じ形態でありながら、(2)に従うと taxi driver と letter-writing のみが総合的複合語の候補であるように見えると述べている。このような例から、Oshita は、形態的定義と語彙・統語的概念を切り離し、次の定義を提案した。

(4) 総合的複合語の語彙・統語的定義³

非主要部が、主要部の形態的起源に関係なく、主要部の義務項条件を満たす複合語は総合的複合語である。

(4)は、Grimshaw(1990)の考え方に基本的に従い、総合的複合語が項をとる性質をもつ主要部をもつものであると定義している。特に、義務項をとるか否かを基準として用いている点が新しい。

(4)の定義を採用することにより、総合的複合語を(5)のような例に拡大する一方で、それまで総合的複合語と考えられてきた(6)のような例を排除した。

- (5) water-resistant, city-bound, accident-prone
- (6) coffee grinder, pipe cleaner, truck driver

さらに、重要なことであるが、Oshita は、全ての動詞由来複合語(verbal compound)の内部構造が(7a)であり、(7b)ではないと主張している。

- (7) a. [[X][V-suff]]
- b. [[XV]-suff]

本稿でも、Oshita と同様、総合的複合語の内部構造が(7a)であると考え。また、総合的複合語は主要部のもつ義務項をとる特性が反映されているもので

あるという考え方も基本的に賛成である。しかしながら、次節で見るように、主要部の他の語彙特性（すなわち、事象構造）により複合語の容認可能性が決められる例があることから、言語学的に有意義な一般化をするためには、主要部の項をとる性質だけでなく語彙特性を満たすように組み立てられた複合語を総合的複合語と考えるべきである。本稿では、主要部と非主要部のこのより広い関係をとらえる総合的複合語の定義を次のように提案する。

(8) 総合的複合語の述語語彙特性による定義

非主要部が、主要部の形態的起源に関係なく、主要部の述語語彙特性条件を義務的に満たす複合語は総合的複合語である。

述語語彙特性についての研究では、一般に、事象構造と呼ばれる述語の意味特性を表す表示レベルと述語項構造と呼ばれる統語特性を表す表示レベルが区別され、項構造は事象構造から派生されると考えられている（Grimshaw(1990), Jackendoff(1990), Levin Rappaport Hovav(1995, 1998)）。(8)では、述語である主要部、あるいは、述語から派生され、述語の語彙特性を継承している主要部の語彙特性を満たさなければ認められない複合語を総合的複合語と定義している。

3. 総合的複合語に課される条件

本節では、最初に Oshita(1995)の総合的複合語の説明方法を概説し、本稿の総合複合語の説明方法との違い順次を明らかにしていく。

3. 1. Oshita(1995)

Oshita が扱っている複合語は、次の2種類の複合名詞と5種類の複合形容詞である。

(9) 主要部が V-ing 形の複合名詞⁴

- a. (Careful) * (spice-) blending ensures the best taste in curries.
- b. (Persistent) * (fund-) raising may save the education library.

(10) 主要部が V-er 形の複合名詞

- a. *cleaner* a'. *pipe cleaner* a". *vacuum cleaner*
 b. *driver* b'. *truck driver* b". *test-driver*

(11) 主要部が V-ing 形の複合形容詞

- a. The * (*god-*)*fearing* man led the people to the Promised Land.
 b. They sell * (*odor-*)*destroying* insoles in this store.

(12) 主要部が V-en 形の複合形容詞

- a. the (*adult-*)*supervised* Halloween party
 b. Al works for the * (*Boston-*)*based* company.

(13) 主要部が V-able 形の複合形容詞

- a. the *machine-washable* sweater
 b. These children are *teacher-trainable*.

(14) 主要部が動詞由来でない形容詞の複合形容詞

- a. the * (*water-*)*resistant* watch
 b. the * (*accident-*)*prone* workers

(15) 主要部が N-ed 形の複合形容詞

- a. a *red-faced unhappy* infant
 b. *rubber-soled* shoes

最後の(15)の複合語は語彙・統語論的定義に当てはまらないので、非総合的複合語として扱われている。残りの6種類は、主要部が義務項を必要とするか否かで、総合的複合語と非総合的複合語に分類されている。(14)の主要部の形容詞は、動詞から派生されているわけではないが、項構造をもち義務項を必要としている。従って、(14)の複合語は、総合的複合語である。

(9)-(13)の複合語の主要部は動詞から派生されており、Oshita は、それぞれ次に示すような基体動詞からの項構造の変化を指定している。

(16) Suffixation of *-ing* (complex event) ⁵

- a. Morphological Process: $]_{V-ing}]_N$
 b. A-Structure Alternation: $(x(y)) \rightarrow Ev(x = \% (y))$

(17) Suffixation of *-er*

- a. Morphological Process: $]_{V-er}]_N$
 - b. A-Structure Alternation: $(x (y)) \rightarrow R=x <(x (y))>$
- (18) Suffixation of *-ing* (adjectival)
- a. Morphological Process: $]_{V-ing}]_A$
 - b. A-Structure Alternation: $(x (y)) \rightarrow R=x (x (y))$
- (19) Suffixation of *-en* (adjectival)
- a. Morphological Process: $]_{V-en}]_A$
 - b. A-Structure Alternation: $(x (y)) \rightarrow R=y (x=\emptyset (y))$
 $(x (y (z))) \rightarrow R=z (x=\emptyset (y (z)))$
- (20) Suffixation of *-able* (adjectival)
- a. Morphological Process: $]_{V-able}]_A$
 - b. A-Structure Alternation: $(x (y)) \rightarrow R=y (x=\emptyset (y))$

(16b)は、基体動詞の項構造に非意味役割項の事象 (Ev)が加えられ、外項が抑制された(suppressed)ことを示す。(17b)は非意味役割項の指示(R)が導入され、 $R=x$ で派生された名詞が指し示すものが基体の外項に対応することを表す。このように基体のある項が派生語と指示関係で結びつくようになることを、その項が R 束縛(R-binding)されたと言うことにする。項構造の外側にある山形括弧「< >」は、項構造を無効にすることを表す。すなわち、V-er 形を主要部にもつ複合語の非主要部は、主要部の項構造の要請によって出てきたものではないことになる。

(19b)の $x=\emptyset$ は、外項が抑制されたのではなく、削除されて項構造に存在しないことを表す。Oshita がこのように項構造の変化を指定したのは、次の例のように、受動形容詞の場合には外項が出てこないことによる。

- (21) a. *The window remained broken by the burglar.
- b. The window remained (un)broken during the civil unrest.

以上、Oshita の派生による項構造変化の指定を見てきた。以下、それぞれが総合的複合語の資格とどのように関わるかを順次見ていく。(16)の複雑事象名

詞を派生する-ing 付加は、非意味役割項の事象が加えられ、外項が抑制されるだけであるので、基体動詞の内項はそのまま継承される。従って、義務的内項をとる基体動詞から派生された複雑事象名詞の V-ing 形を主要部にもつ複合語は、義務項を非主要部にとらなければならないことから総合的複合語であることになる。本稿でもこの立場を採用する。

(17)の V-er 形の派生語では、外項が R 束縛され、項構造が無効にされるという変化が指定されている。これによると、主要部に V-er 形をもつ複合語は、主要部が項構造を持たないことから義務項をとることなく、すべて非総合的複合語であることになる。本稿は、次節で見るように義務項を取らなければならない例が存在することから、この立場に反対する。

(18)の V-ing 形容詞では、基体動詞の外項が R 束縛されるが、内項はそのまま継承される。従って、基体動詞が義務的内項を持つ場合、その語彙特性が V-ing 形容詞に継承されるので、そのような形容詞を主要部にもつ複合語は総合的複合語となる。本稿でもこの立場を採用する。

(19)、(20)の受け身の意味を持つ派生形容詞は、基体動詞の直接内項が R 束縛され、外項が削除されるので、単純他動詞から派生された場合、義務項を要求する語彙特性が失われることになる。従って、(19)、(20)の派生形容詞が単純他動詞などの内項を一つだけとる基体動詞から派生された場合、この形容詞を主要部とする複合語は非総合的複合語となる。しかしながら、(19b)の2行目に示したように、基体動詞が複数の内項をとる場合、間接内項が項構造に残るため、この派生形容詞は間接内項を義務的に要求する。従って、複数の内項をとる基体動詞から派生された受動形容詞を主要部にもつ複合語は、総合的複合語となる。本稿でもこの立場を採用する。

本稿では、項構造に基づく語彙特性から要請された義務的要素の実現については Oshita に従うが、次節で見るように、事象構造から要請される義務的要素の実現という現象があることから、総合的複合語の定義を(8)のように拡大すべきであると主張する。

3. 2. V-er形を主要部にもつ総合的複合語

Oshita (1995) では、V-er 形を主要部に持つ複合語がすべて非総合的複合語で

あるとされた。これは、次に述べる理由による。すなわち、次の例に示されるように、主要部が同じ形をしていながら項と思われる要素を非主要部に必ずしもとるわけではないことから、主要部が義務的に項をとっているのではないと考えられるからである。Oshita が提案した総合的複合語の語彙・統語的定義によると、主要部が義務項を要求しない複合語は、非総合的複合語であることになるからである。

- | | | | | | |
|---------|----------------|-----|-------------------------|-----|------------------------|
| (22) a. | <i>cleaner</i> | a'. | <i>pipe cleaner</i> | a". | <i>vacuum cleaner</i> |
| b. | <i>driver</i> | b'. | <i>truck driver</i> | b". | <i>test-driver</i> |
| c. | <i>grinder</i> | c'. | <i>coffee grinder</i> | c". | <i>water grinder</i> |
| d. | <i>fighter</i> | d'. | <i>fire-fighter</i> | d". | <i>freedom fighter</i> |
| e. | <i>smoker</i> | e'. | <i>cigarette smoker</i> | e". | <i>chain smoker</i> |

(22)の左列の例では V-er 形が単独で生じ、中央列の例では項に相当する要素が非主要部に生じ、右列の例では項とは言えない要素が非主要部に生じている。そして、V-er 形が項をとらなくとも容認不可能にならないことから、義務項を要求しない非総合的複合語であると考えられた。

しかしながら、Selkirk (1982) の次の例が示すように、V-er 形で義務項を要求する例がある。

- (23) a. *?She's an avid devourer.
 b. an avid devourer of trees
 c. tree devourer

(23c)の複合語の主要部である *devourer* は、(23a,b)が示すように、単独で生じることが出来ず、義務項を要求する。従って、(23c)の複合語は、Oshita の語彙・統語的定義に従っても、総合的複合語である。そうであると、V-er 形が基体動詞の項構造を無効にすると指定している(17)は、修正されなければならないことになる。(23)で示されるように、*devourer* は基体動詞の義務的目的語項を継承していると考えられるからである。

また、Grimshaw (1990) で複雑事象名詞 (complex event nominals) を見分ける基準の一つとして用いられているように、動作主指向の形容詞による修飾は名詞の項をとる特性を引き出す⁶。この形容詞を用いて、名詞が項をとる性質を有するか否かを診断することが出来る。次例に見られるように、この種類の形容詞が V-er 形を修飾しているということは、その V-er 形が項をとる名詞であることを示す。

- (24) a. a persistent eater of pasta⁷
 b. a careful eater of pasta

ここまでの議論から、(22) の例が示す、V-er 形が項をとってもとらなくてもよいという性質は、V-er 形が項をとらない名詞だからではなく、項をとる（すなわち、基体動詞の項構造を継承している）V-er 形と項をとらない語彙化されている V-er 形の 2 種類があるからであると考えた方がよい。従って、次の容認不可能な例も、Selkirk (1982) が論じているように、複合語の主要部の項が非主要部に実現されていないことによると考えた方がよい。

- (25) a. pasta-tree eater in trees
 b. ??tree pasta-eater⁸
 c. *tree eater of pasta
 d. *pasta tree-eater

Oshita は、V-er 形が項を全く要求しないという立場から、(25c,d) の容認不可能性が次の理由によると考えている。すなわち、V-er 形の語彙概念構造において、基体動詞の内項に相当する参加者が（R 束縛された項に相当する場合を除き）他の参加者より目立つので、その意味的な階層関係の違反により (25c,d) の容認不可能性が生じると考えている。しかしながら、上で見たように、V-er 形が項をとる性質をもっていると考えられることから、ここであえて新しい階層関係を提案しなくとも、項構造で説明できると考えた方がよい。

以上の議論から、基体動詞から V-er 形を派生するときの項構造の変化は、

(17)のように指定されるのではなく、次のように指定すべきである。

(26) Suffixation of *-er*

- a. Morphological Process: $]_{V-er}]_N$
- b. A-Structure Alternation: $(x (y)) \rightarrow R=x (x (y))$

(26)では、単純他動詞を例にとり示してあるが、派生形は外項が R 束縛されているだけで、項構造を無効にする操作は組み入れられていない。従って、V-er 形は語彙化されていない場合項をとる性質をもつ。

3. 3. V-en形を主要部にもつ総合的複合語

前節までは、総合的複合語に対して課される項構造による条件を論じてきた。本節では、複合語の容認可能性を左右するものに項構造から出てくる条件だけでなく、事象構造から出てくる条件もあることを述べ、この条件に従う複合語も総合的複合語と考えた方がよいと主張する。

Grimshaw and Vikner(1993)は、事象構造に基づく条件により義務的要素が要求される事例として、義務的付加詞(Obligatory Adjunct)の例を挙げている。(27)のような「建設的」達成動詞("constructive" accomplishment)が受動態で用いられると、(28)、(29)のように付加詞が義務的となる。

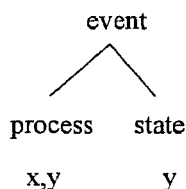
- (27) a. draw (a picture), knit (a sweater), dig (a hole)
- b. make, build, create, construct, erect, manufacture
- c. cook (a turkey), paint (a house), fix, freeze, broil/fry/saute, develop (a film)
- (28) a. *This house was built/designed/constructed.
- b. This house was built/designed/constructed by a French architect.
- c. This house was built yesterday/in ten days/in a bad part of town/only with great difficulty.
- (29) a. *Tomatoes are grown; *The best tomatoes are grown
- b. (The best) tomatoes are grown by organic-farmers/in Italy/organically.

しかしながら、(30)のような「破壊的」達成動詞("destructive" accomplishment)の場合には、受動態になっても義務的付加詞が要求されることはない。

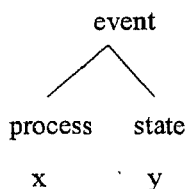
- (30) a. destroy, kill, shoot, ruin, break, arrest
 b. The boat was destroyed (by the enemy)
 c. The burglar was arrested/shot (by the police)

義務的付加詞に関する建設的達成動詞と破壊的達成動詞の違いは、事象構造の統語的具現に課される適格性の条件により説明されるとされている。適格性の条件の一つに「下位事象が存在することを統語的に示す要素が存在しなければならない」というものがある⁹。達成動詞の事象構造は、行為の過程と達成された状態の二つの下位事象から成る。destroyのような破壊的達成動詞は、目的語である主題(Theme)が行為の始まる前に存在しており、出来事の後で破壊されたことを表す。これに対して、建設的達成動詞では、主題は出来事全体が生ずるまでは存在しないということを表す。破壊的達成動詞では、主題は始めから関わっており、破壊的達成動詞の行為の過程に参加していると言えるが、建設的完成動詞の主題は、行為が終わって完成するものであり、行為過程には参加していないと言える。従って、下位事象に参加する項は、(31)に示されるような形で、下位事象と結びついている。

(31) a. *x destroys y*



b. *x builds y*



Grimshaw and Vikner は、下位事象と結びついている参与者項がその事象を同定してくれると考える。従って、受動態になった場合、破壊的達成動詞の主題項が行為の過程と結果状態の両方を同定し、条件を満たすのに対して、建設的達成動詞の主題項は、結果状態しか同定しないので、行為過程を同定してくれる

要素が必要となる。このことから、(28)、(29)に見られるように、行為と結びつく意味を持つ付加詞が義務的になる。

Grimshaw and Vikner は、項構造条件と事象同定条件の組み合わせは、なぜ義務的付加詞が受動態に限定され、能動形に見いだされないかをも説明してくれると述べている。能動態では、下位事象は項構造を満たす要素により同定される。例えば、(32a)において、主語が *design* の *process* 成分を同定し、目的語が *state* 成分を同定する。

(32) a. Bill Blass designed the dress

b. *The dress was designed

(33)	Argument structure	Event structure
<i>design</i>	x, y	[process, state]
<i>designed</i>	x- \emptyset , y	[process, state]

従って、能動態では、事象構造の同定条件が働いていることが見えない。この条件は、項構造で要求される要素により自動的に満たされるからである。

しかしながら、受動態では、外項（この例では動作主）が抑制されている。外項の抑制は、(33)の2行目の \emptyset により表されている。抑制された項は、統語表現では満たされないことから、受動態では項構造に関する限り *by* 句は随意的になる。しかしながら、達成動詞の事象構造は、二つの部分が残っており、*process* と結果状態が共に同定されなければならない。従って、受動態では、項構造の要求と事象構造の要求が分離していることになる¹⁰。

この義務的付加詞の現象は、複合語においても観察される。Grimshaw and Vikner も次の例を挙げている。

(33) a. *a designed house

b. an architect-designed house

c. a carefully designed house

(34) a. ??a photographed building

b. a much-photographed building

この他に、Grimshaw and Vikner が容認不可能と判定した (35a) の例に対して、(35b-d) のように義務的付加詞を付けると容認可能となる例もある。

- (35) a. *a built house
- b. a well-built house
- c. a custom-built house
- d. a factory built house

以上のように、事象構造に関わる条件から要請される義務的付加詞の現象を考慮に入れると、複合語の種類は3種類あることになる。主要部と非主要部の関係が、文脈等により意味的に結びつけられる主要複合語 (primary compound)、主要部の項構造により非主要部の選択が決定される複合語、主要部の事象構造から生じる条件で非主要部の選択が決定される複合語の3種類である。主要複合語以外の2種類の複合語は義務的要素を必要とする点で共通の特性を持つ。この2種類の複合語は従う条件が異なるが、義務的要素を必要とするという重要な特性を共有していることから、意味関係さえ保証されればどんな組み合わせも認められ、規則の定式化を受け付けない主要複合語とは大きく対立する。また、義務的要素を必要とする要請の出所は厳密には異なるが、主要部の関連した述語語彙特性から出てきていることを考慮すると、主要複合語と対立する複合語としてまとめて総合的複合語と定義するのが良いと思われる。このことから、(8) のような総合的複合語の述語語彙特性による定義を提案する。

4. まとめ

本稿では、Oshita (1995) で論じられた総合的複合語の派生方法と定義を再検討し、派生方法の一部修正と新しい定義を提案した。すなわち、項構造が基体動詞から派生語へ継承される場合の指定方法を V-er 形で変更する必要があること、総合的複合語に課される条件には、項構造に基づくものの他に事象構造に基づくものがあり、両者を統合する (8) の定義が望ましいと主張した。

注

* 本稿の例文の一部について、新潟大学外国人教師 Ian C. McGill 氏にインフォーマントとして判断して頂いている。ここに記して感謝の意を表す。

1. 定義の原文は以下の通り。

Morphological definition of synthetic compound

A compound with a deverbal head is a synthetic compound.

2. 定義の原文は以下の通り。

Morpho-thematic definition of synthetic compound

A compound whose nonhead satisfies the internal argument requirement of its deverbal head is a synthetic compound.

3. 定義の原文は以下の通り。

Lexico-syntactic definition of synthetic compound

A compound whose nonhead satisfies the *obligatory* argument requirement of the head, *irrespective of* the latter's morphological origin, is a synthetic compound.

4. 主要部が V-ing 形名詞のとき、その名詞には、結果・具象名詞 (result/concrete nominals)、単純事象・過程名詞 (simple event/process nominals)、複雑事象名詞 (complex event nominals) の 3 種類が有り、Oshita はそれぞれについて検討しているが、ここでは総合的複合語の複雑事象名詞を主要部にもつものだけを取り上げる。主要部が結果・具象名詞あるいは単純事象・過程名詞の場合は、非総合的複合語であり、本稿の議論には直接関わらない。

5. (16)-(20)における項構造の変化指定は、単純他動詞を例として記述してある。非対格動詞、二重目的語動詞など基体動詞の項構造が異なると表記が異なることになるが、非意味役割項の事象 (Ev) が加わるとか非意味役割項の指示 (R) が直接内項を束縛するとかの操作は統一的に行われる。(19)は、Oshita (1995) で義務項を必要とする例が二重目的語に限られるので、二重目的語を例とした項構造の変化も追加指定してある。

6. Oshita (1995) は、次のような例においても、項が文脈で与えられていない限り適格にはならないことから、動作主指向の形容詞に修飾された名詞が項をとる性質を有していると考えている。

- (i) a. Relentless *hunting* will decrease the population of whales
- b. Careful *blending* ensures the best flavor in coffee
- (ii) Only frequent *examination* by the doctors kept John healthy

7. インフォーマントは、この例を"a person who eats pasta persistently in spite of the obstacle...for example, difficulty in rolling spaghetti with a fork"と解釈した。このことから、この複合語が事象性を持ち、述語動詞の語彙特性を継承していることが分かる。

8. (25b)の例は、Selkirk(1982)では単に容認可能として提示されていたが、Oshita(1995)では容認可能性が低いと判定されていた。私のインフォーマントも容認可能性が低いと指摘した。

9. Grimshaw and Vikner(1993)では、事象に参加する項がこの働きをすると考えている。Levin and Rapoport Hovav(1998)では、次のような下位事象同定条件を提案している。

- (i) Subevent Identification Condition: Each subevent in the event structure must be identified by a lexical head (e.g., a V, an A, or a P) in the syntax.
10. Sadler and Spencer(1998)では、次のように表示されている。

- (i) a. Active form: *Tom broke the vase.*

[[x ACT]	CAUSE [BECOME [BROKEN(y)]]]	LCS
break: <x <y>>		PAS
Tom	broke the vase.	syntax
SUBJECT	OBJECT	
- b. Passive form: *The vase was broken by Tom.*

[[x ACT]	CAUSE [BECOME [BROKEN(y)]]]	LCS
broken: <(x) <y>>		PAS
The vase	was broken (by Tom).	syntax
SUBJECT	OBLIQUE	

参考文献

- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Grimshaw, J. B. and S. Vikner (1993) "Obligatory Adjuncts and the Structure of Events," in Reuland, E. and Abraham, W. (eds.) *Knowledge and Language. Vol. II. Lexical and Conceptual Structure*. Dordrecht: Kluwer. pp.143-155.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic structures*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Levin, B. and M. Rapaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1998) "Morphology and Lexical Semantics," in A. Spencer and A. M. Zwicky, eds., *The Handbook of Morphology*, Blackwell Publishers, Oxford.
- Levin, B. and Malka Rappaport (1986) The formation of adjectival passives. *Linguistic Inquiry* 17. pp.623-661.
- Meys, W. J. (1975) *Compound Adjectives in English and the Ideal Speaker-Listener: A Study of Compounding in a Transformational-Generative Framework*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Oshita, H. (1994) "Argument structure template and formation of English deverbal adjectives." *MIT working papers in linguistics* 23. pp.247-65.
- Oshita, H. (1995) "Compounds: A view from suffixation and a-structure alternation," in Booij, G. and J. van Marle (eds.) *Yearbook of morphology 1994*. Dordrecht: Kluwer. pp.179-205.
- Sadler, L. and A. Spencer (1998) "Morphology and argument structure," in Spencer, A. and A. M. Zwicky (eds) *The Handbook of Morphology*, Oxford: Blackwell, pp.206-236.
- Selkirk, E. O. (1982) *The syntax of words*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.